

大学における初年次教育の成果と問題点

— 複数クラスの合同セミナー実施を通して —

A case study on the outcome and problems of first-year seminar in university education :
a new teaching method concerning class size and its components.

中里亜希子[※]

Akiko Nakazato[※]

After the late 1990s, many Japanese universities introduced first-year seminar (FYS) to allow students to adjust smoothly to college life. What is the most effective activities in classes for first-year seminar in Japanese universities? I tried to combine four classes to work together in one big-size class. The class comprises Japanese students and foreign students from China, South Korea, Vietnam, and Nepal. The purpose of this research is to make better effects and problems clearer that I conducted at class activities for first-year seminar from 2014 to 2015 in A university.

Keywords : First Year Seminar, First Year Experience, Group work

キーワード：初年次セミナー、初年次教育、グループワーク

はじめに

高校生から大学生への移行問題が着目され、その対応策としての初年次教育充実への取り組みが広がっている。2008年12月に出された中央教育審議会「学士課程の構築に向けて（答申）」では、「初年次における教育上の配慮、高大連携」において大学に期待される取組として「学びの動機付けや習慣形成に向けて、初年次教育の導入・充実を図り、学士課程全体の中で適切に位置づける」としている。答申は、本文中で「初年次教育は、『高等学校や他大学からの円滑な移行を図り、学習及び人格的な成長に向け、大学での学問的・社会的な諸経験を成功させるべく、主に新入生を対象に総合的につくられた教育プログラム』あるいは、『初年次学生が大学生になることを支援するプログラム』として説明される」としている。

また、「入学者選抜をめぐる環境変化、高等学校での履修状況や入試方法の多様化等を背景に、入学者のあり方も変容しており、総じて、学習意欲の低下や目的意識の希薄化などが顕著になっている（中央教育審議会、2008）」としている。

著者がA大学の非常勤講師として在籍し、初めて初年次教育に携わったのは2009年である。この年は、主に留学生を中心としたクラスにおいて、大学への適応を促すための授業であったと記憶している。その後2014年に2度目の初年次教育担当になるまでの間、出口である進学・就職を目的とした教育活動に携わり初年次教育から離れていた。この4年間、出口である就職支援を通して学生から得

※日本経済大学経済学部商学科

られた大学生活の振り返りで驚かされたことは、「大学に友人はあまりいなかった」、「大学1、2年生の時に何をしたのかあまり記憶に残っていない」、「就職活動で胸を張って言える大学生活の内容がない」などの意見であった。これらの意見は、就職活動で提出する履歴書やエントリーシートが書けないことにつながっていた。このような学生は、A大学に入学してくる際、学習意欲が低く、明確な目的意識がないこともある。こうしたことから、入学当初の状態から何の変化もなく就職活動の学年へとあがってしまった状態であると考えられる。

このような学生と接していくうちに、A大学における初年次教育は、どのような効果が期待され設定されているのかと改めて考えるきっかけとなり、どのような授業を展開し、「初年次学生が大学生になることを支援」できるかについて取り組む必要性を認識した。

さて、本研究では、第一に、A大学における初年次教育の一環であるS.D.セミナーの活動内容などについてまとめておく。第二に、著者が担当した経済学部商学科に2014年度に入学した学生に対する初年次教育の一環としてのS.D.セミナーの実施と合同セミナーの実施について説明を加え、初年次教育から2年次教育（基礎ゼミ）への移行、合同セミナーの継続実施内容を加える。第三に、2年間の合同セミナー実施に関するアンケート調査から見えてくる成果と、初年次教育としてのS.D.セミナー実施がどのような問題を抱え、今後どのような取り組みが必要であり、学生にとって効果が期待できるものかについて考察していく。

I. 研究の背景：A大学における初年次教育の一環としてのS.D.セミナー

初年次教育の定義は「高校（と他の大学）からの円滑な移行を図り、学習および人格的な成長に向けて大学での学問的・社会的な諸経験を成功させるべく、主に大学新生を対象に総合的につくられた教育プログラム」である（濱名・川嶋、2006）。また、ここでいう成功とは、「大学進学によって学生が目指している教育上の目標（大学卒業、あるいはそれに続く大学院進学）、また個人的な目標（就職など）の実現に向けて順調に進んでいること」を示している（前掲書）。

関西国際大学の濱名は初年次教育の内容を以下のようにまとめている（前掲書）。①大学生活への適応（大学生活、学習、対人関係等）②大学で必要な学習技術の獲得（読み、書き、批判的な思考力、調査、タイム・マネジメント）③当該大学への適応④自己分析⑤ライフプラン・キャリアプランづくりへの導入⑥学習目標・学習動機の獲得⑦専門領域への導入、これら七つの教育内容だけでなく、これらを教えていく哲学、ベタゴジーに特徴があるとしている。

A大学における初年次教育の一環として、S.D.セミナーが開講されている。S.D.セミナーとは、Self Development Seminarであり、新生が大学生活を有意義に過ごせるように、大学生活の過ごし方、学習の仕方や研究方法、友人同士や先生とのコミュニケーションを深めるためのゼミであるとともに、新生の「自己開発」のためのゼミであり、1年次の必須科目である。学生が自らの関心や将来の進路を踏まえ、「大学では何をどのように学ぶのか」を中心課題に、4年間の学習・生活の設計と自己開発・改革を押し進めるための指導を行う。少人数編成とし、主体的学習と自立的生活の確保を促し、またディスカッション、スピーチ、プレゼンテーションの訓練等を通じて、学生生活を送る

上で身に付けておくべき基本的な技能・心構えを習得させること目的とする（HP より）。

以下、学習目標（到達目標）と、教育概要（教育目的）を挙げる。

学習目標（到達目標）

【春学期】

- ①大学生活に慣れることができる。
- ②大学生活に目的意識を持つことができる。
- ③大学での学習の方法や研究の方法がわかる。
- ④学友や担当の教師との相互理解を深めることができる。

【秋学期】

- ①大学生活に積極的に慣れることができる。
- ②大学生活に強い目的意識を持つことができる。
- ③大学での学習方法や研究方法がわかる。
- ④豊かな人間関係を育てることができる。
- ⑤レポート（構成、論述、表現）を書くことができる。

教育概要（教育目的）

【春学期】

セミナーの主体は、学生諸君であるという立場に立って、授業計画に基づいて授業を進める。春学期は新しい環境の中で、学生諸君一人一人が大学生活に適応し、多くの友人をつくり、大学生活に目的意識を持ち、生活・学習に主体的、意欲的に取り組むように支援する。また、少人数のグループを編成し、共に学び、役割責任・協力・奉仕・喜びを体得し、自己の生き方を考える。

【秋学期】

セミナーの主体は、学生諸君であるという立場に立って、授業計画に基づいて授業を進める。学生諸君が大学生活や学習で当面しているいろいろな問題を取り上げ、協議を行い、学友との触れ合いの中で問題の解決や対応を目指す。後半は、学生諸君一人一人が研究したいテーマを決め、そのテーマを追求し、まとめ、発表する活動を行い、レポートの作成方法を学ぶ。

授業計画表

【春学期】

1	オリエンテーション（セミナーの目標と受講の心構え、シラバスの説明、個人カードの記入）
2	大学の規則・規定を理解しよう（学生便覧を参考）
3	大学の施設と利用方法を知ろう（学生便覧を参考）
4	自分を知ろう（自己評価、個人カードの利用）
5	仲間を知ろう①（全体での自己紹介、出身地域、高校での私、大学で身につけたいもの、将来の夢）
6	仲間を知ろう②（小集団での自己紹介）
7	ノートを取ろう
8	授業に参加しよう
9	図書館・情報センターを活用しよう①（情報の検索と収集）
10	図書館・情報センターを活用しよう②（情報倫理）
11	地域を知ろう（地域情報）
12	情報を整理しよう
13	情報を整理しよう
14	スポーツを楽しもう
15	春学期を振り返ろう

【秋学期】

1	オリエンテーション 長期休みを振り返ろう
2	レポート作成の説明を聞こう（レポートの様式、手書き〈A4 3～4枚〉）
3	大学生活を見直そう 個人テーマを決めよう①
4	スポーツを楽しもう
5	個人テーマを決めよう②
6	大学祭に参加しよう
7	2年次のコース選択を考えよう（学生便覧）
8	時間管理を考えよう 個人テーマを追求しよう①
9	個人テーマを追求しよう②
10	個人テーマを追求しよう③
11	個人テーマをまとめよう①
12	個人テーマをまとめよう②
13	個人テーマをまとめよう③
14	秋学期を振り返ろう
15	次年度に向けて

このような内容で、A大学の初年次教育の一環であるS.D.セミナーは開講されている。

II. 初年次教育

1) 2014年度入学者に実施した S.D. セミナー活動内容

著者は2014年度に入学した商学科の学生に対して S.D. セミナーを実施した。商学科には、4 クラス69名の学生が所属している。ちなみに著者が担当したクラスの人数は、18名であり、そのうち日本人学生5名、留学生13名（中国人11名、ベトナム人2名）である。第1回から第5回までの授業をクラスで行い、その後の2回を別の商学科の1つのクラスと合同で実施した。その後、別の2クラスの先生にも呼びかけ、4クラス合同の授業が始まった。

第1回から第5回の授業は、シラバスの授業計画表にそって進めてみたのであるが、日本人学生と留学生との交流を持たせることがなかなかスムーズにいかなかった。原因としては、留学生の日本語能力不足、留学生の数に圧倒された日本人学生が萎縮してしまったことなどが挙げられる。このような環境のなかで、学生便覧を使った大学の理解を深めるワークなどで日本人学生と留学生が少しずつ打ち解けていった。他のクラスでも、日本人学生と留学生との交流がスムーズにいかないとの声があり、日本人学生が欠席し始めたこともあって、商学科全体で一度集まって全員の顔合わせをしようと商学科全体のセミナーが始まったのである。

この全体の合同セミナーを始めるにあたり、各クラス担任（A 大学では、クラスカウンセラーと呼ぶ）教員同士で、3つの目標を設定した。一つ目、別のクラスの友達を作り商学科全体に友達の輪を広げること、二つ目に、友達とペアワークやグループ活動を通して大学生生活に慣れること、三つ目に、商学科所属の教員の顔を知り相互理解を深めることとした。以下に商学科の合同 S.D. セミナーの活動内容をいくつか紹介する。

活動内容

【春学期】

9	ペアワーク・グループワーク：最近気になるニュースについて
10	ペアワーク・グループワーク：一番嬉しかったこと・一番大変だったこと
11	ペアワーク・グループワーク：スポーツ大会の振り返り
12	授業を聴いてみよう：各クラスカウンセラー教員の講義のメモをとる
13	ペアワーク・グループワーク：「雨」にまつわる出身国の話について
14	ペアワーク・グループワーク：春学期の学習の振り返りと試験勉強について
15	ペアワーク・グループワーク：春学期全体の振り返りと長期休暇の過ごし方について

春学期は、授業時間外に大学での行われるスポーツ大会（綱引き大会）への出席が、授業への参加としてみなされたため、教室内での授業は7回であった。毎回の授業の始めに、別のクラスの友達とペアになり、自己紹介の練習を重ねることによって、自己紹介として各自が自分の何を紹介すれば相手が興味を持ってくれるかを学んだようである。また、他人の自己紹介を聞いて、その人を紹介する（他己紹介）の練習もしてみると、人の話を聞きながらメモをとる訓練にもなったようである。

この春学期の成果として、学生同士が同じ商学科にどんな学生がいるのか、どこからの留学生がいるのか、日本人学生はどこ出身の学生なのか、そして違うクラス担任（クラスカウンセラー）の教員はどんな先生なのかを知ることができた。

【秋学期】

1	ペアワーク・グループワーク：長期休暇の振り返りと資格取得に関すること
2	ペアワーク・グループワーク：秋学期の過ごし方について
3	個人ワーク：「私の大学生活～社会人への準備～①」：自分の成長プラン
4	インターンシップ報告会への参加
5	個人ワーク：「私の大学生活～社会人への準備～①」
6	個人ワーク：「私の大学生活～社会人への準備～②」：自己分析
7	個人ワーク：「私の大学生活～社会人への準備～②」
8	個人ワーク：「私の大学生活～社会人への準備～③」：イベントを考える
9	個人ワーク：「私の大学生活～社会人への準備～③」
10	商学科の学生全員と教員の親睦を深めるイベントを考え実行する
11	クラス毎のワーク：商学科 S.D. セミナーの文集を作成しよう
12	2年次以降のコース選択を考える：先輩とコースの先生との交流
13	インターンシップについて考えよう：インターンシップ研修生と話そう
14	ペアワーク・グループワーク：春休みの過ごし方と2年次への準備について
15	ペアワーク・グループワーク：秋学期の振り返りと文集の配付

春学期が終わり長期休暇を過ごすことで、ペアワークやグループワークのしかたを忘れていた学生もみられたが、すぐに授業に参加する姿勢を取り戻すことができた。

秋学期は、大学の授業計画表にある「個人テーマをまとめよう」をどのように合同セミナーで実行するかを中心にまず考えた。個人テーマをわざわざ大教室ですることに意味があるのかどうか懸念されたが、学生同士お互いの考えをシェアしたり、アドバイスし合ったりして作文する時間が有意義なものとなった。

「個人テーマをまとめよう」という課題において、各自がテーマを決めて何かレポートを作成することが難しいと考えたので、大きなテーマを教員が準備し、それに対して各自が小テーマを設定し作文した。大きなテーマは、1つ目が「大学生活で自分の伸ばしたいところ、改善したいところ、できるようになりたいこと」、2つ目が「自己分析：私ってこんないい人なんです、こんないいところがあるんです」、3つ目が「私たちのイベントー大学時代にこんなイベントしてみたい」である。

これには、初年次教育から離れ出口（進学・就職）支援を担当していた著者が、初年次の段階で一度考えておく次年度以降への移行がスムーズになると考えたためである。また、学生は大学生活で達成したい目標をたて実行することがあまりないこと、学生が自分のいいところ、人から褒められたことを自分の言葉で表現するのが苦手なこと、そして各自の目標と自分のよいところを結びつけて、別の行動に移す機会が少なく実行できていないことなども見られることから上記の3つの大きなテーマを設定した。

第一、第二テーマは、主に個人作業となり、第三テーマは、個人の自己分析を持ち寄り、グループワークをした。それぞれの良さがどのような役割に生かせるのかについても検討する時間を設けた。

大学の授業計画表にある「2年次のコース選択を考えよう」という内容について教員全員で検討し、「インターンシップの報告会への参加」、「インターンシップ研修生（先輩研修生）の話を聞き交流をもつこと」、「コース選択にコース担当教員の説明と、各コースの先輩に話を聞くこと」という3つの時間を設定した。このような時間を取ることで、初年次の段階で、自分のライフプラン、キャリアプラン作りへの導入、学習目標・学習動機の獲得、専門領域への導入が可能になる。学生が同じ学科の先輩の話や様子を見て、自分の2年次以降の姿をイメージする機会にもなると考える。

秋学期の活動内容は広がりをもつことができ、秋学期だけでなく、春学期の活動を合わせた「合同S.D.セミナー総まとめ」の時間をつくる必要があると考えた。学生の中には多くの留学生がおり、その留学生から、「日本語学校では、クラスみんなで卒業前に文集を作る」というアイデアがでたので、「合同S.D.セミナー総まとめ」の活動として導入することとした。

「合同S.D.セミナー総まとめ」の一つとして、各クラスの文集作成、テーマ別個人ワークの作文作成、アルバムの要素を含むページ作成を行うことに決めた。

各クラスの文集作成において、商学科全体でのワークではなく、各クラスのグループワークの時間となった。クラスカウンセラーである教員が、クラスの文集内容やアルバム要素を含むページ作成に指示を出すことはなく、クラス全員で話し合っ進める方法を選択した。大教室で行ったのであるが、各クラスの様子や活動の進捗が見えるので、別のクラスの進め方を見て自分のクラスの活動を振り返るという時間になったようである。各クラスで、アルバム用の写真撮影をしたり、写真のページ構成を考えたり、アイデアを出し合う時間にもなった。また、作成期間、提出日等も定められているため、クラス全体での協力・チームワークが必要となる時間であった。

テーマ別個人ワークの作文作成では、上記の個人テーマでのワークで行った作文を各自が250～300字程度の作文にまとめることにした。この字数制限250～300字でまとめるのは、就職活動の一つであるエントリーシートの制限文字数に合わせるものとした。レポート作成の練習とまではいかないものの、学生は、自分の言葉で書くことに苦戦しており、特に留学生の多くは、日本語作文を苦手としており個別指導の時間を要した。

初年次S.D.セミナーにおいて、日本人学生と留学生が交流し、お互いの名前を呼び合い、セミナー時間以外の授業や学内施設で言葉を交わす様子を目にし、少しずつ合同セミナーの効果が見え始めたように思えた。しかし、個人テーマの3つ目に設定した「私たちのイベントー大学時代にこんなイベントしてみたい」について計画してみただけの状態であることが懸念材料として残っていた。このワークは、個人テーマのワークではあったが学生同士で話が弾んでいたのでは何か別の形で実現できないかと検討を重ねた。その結果、2年次においても、このまま合同セミナーを継続し、そのなかでイベントを計画することになったのである。

2) 2年次教育への移行と合同セミナーの継続実施

初年次教育においてS.D.セミナーを合同セミナーとして実施するにあたり、一) 別のクラスの友達を作り商学科全体に友達の輪を広げること、二) 友達とペアワークやグループ活動を通して大学生活に慣れること、三) 商学科所属の教員の顔を知り相互理解を深めることと三つの目標を設定した。これらの目標は、友達ができて大学に来るのが楽しくなったという学生の感想から、概ね達成できたのではないかと考える。しかし、別の声として、「自分たちで何か計画して実行したい」という意見もあがった。この言葉は、クラスカウンセラーの教員同士で話していたイベント計画と目的は合致すると考え、2年次教育への移行、2年次教育の充実を目的とした合同セミナーの継続実施を決断した。

A 大学では、初年次教育の一環であるS.D.セミナーは、2年次においてクラス（学生）とクラスカウンセラーはそのまま持ち上がりとなり、「基礎ゼミ」という名称に変更となる。今回、2年次にあがる際、大学の事情により、クラスカウンセラーの変更が一つのクラスであった。新しいカウンセラー教員は、合同セミナーに対して最初は多少の不安があったようである。しかし、担当クラスの学生がカウンセラー教員を迎え入れ、合同セミナーについて説明したり、率先してカウンセラーに声かけをしていた。そのお陰で、カウンセラーと学生が打ち解けるのに多くの時間はかからなかった。以下に、2年次配当科目「基礎ゼミ」のシラバスを紹介する。

2年次「基礎ゼミ」

春 学 期		秋 学 期	
1	オリエンテーション	1	オリエンテーション
2	挨拶を通じたコミュニケーション	2	レポートの構成要素
3	自己紹介	3	構成例
4	ほうれんそう	4	課題の発見
5	他者紹介	5	テーマの絞り込み
6	話し合い（アサーション）	6	レポート全体のアウトライン
7	会議運営（ファシリテーション技法）	7	情報を集める
8	討論（ディベート）	8	研究の対象
9	非言語コミュニケーション	9	研究の背景
10	ブレインストーミング（問題解決法）	10	先行研究の提示
11	マナー講座1	11	研究目的
12	マナー講座2	12	方法
13	マナー講座3	13	結果の証明
14	マナー講座4	14	結論の提示
15	まとめ	15	今後の課題（3年次以降の就職活動について）

このように基礎ゼミの年間授業計画は立てられている。

以下では、学生の要望としてあがった「自分たちで何か計画して実行したい」という思いを形にした内容について紹介する。

2年次秋学期において「企業研究・施設見学」という形で実施することになった。商学科には観光コースが設置され、将来観光業に進みたいという学生が日本人・留学生を問わず多く見られる。将来の就職活動のために企業研究する方法、施設を見学し自分の目で見て体験すること、体験したことを自分の言葉でまとめる活動を計画し、長崎県佐世保市にある「ハウステンボス」を訪問することにした。

計画・実施内容

1	グループ分け・活動	ハウステンボスは〇〇だ！ハウステンボスに対する各自のイメージや情報を集める。グループリーダーとサブリーダーを決定。
2	グループ活動	企業研究・施設見学場所・各グループのテーマ設定
3	グループ活動と発表	各グループ活動について報告・発表：施設見学前に調べたこと、わかったこと、施設見学で行う活動など
4	施設見学	各グループに分かれ、楽しく行動する。施設見学3カ所で、グループ写真を必ず撮影
5	グループ活動	見学内容・講演内容などをグループでまとめ、発表原稿作り、発表練習
6	総まとめ	各グループによる活動報告会

注：この活動費用は、学生が学費の一部として納入している交流実習費を使用している。

この内容をみると、「自分たちで何か計画して実行したい」という学生の思いから離れているのではないと思われるかもしれない。ここで、教員が指示したルールは以下の3点のみである。1) グループで活動すること、2) グループで施設見学をし、写真撮影してくること、3) 事前準備内容のやり方と、事後報告のやり方である。活動スケジュールを始めとする見学日一日の活動内容については、学生に求められれば応える程度であり、必要以上の干渉はなかったと考える。その他に授業スケジュール、施設見学のための旅行会社との交渉などは教員が担当した。以下に、授業・施設見学に関する運営内容記録を紹介する。

【事前準備】

- ①商学科は4クラスあり、留学生も在籍。クラス間交流も兼ねていることから、第一回目のグループ分けは注意を要する。1年半かけて仲良くなっているためグループ分けに不満を述べる学生はいないだろう。各クラスで6グループにわかれ、各クラスからのクラス混合1チームになり、混合グループが6チームができる。
- ②グループ分けが終わると、各チームで話し合いによりリーダーとサブリーダー、チーム名を決定。
- ③「ハウステンボスは〇〇だ」というテーマで言葉を繋ぐゲームをしたあと、各チームがゲームであがった言葉を参考に、研究テーマを決定。決定に従い、各チームがハウステンボス施設内で必ず訪問する3カ所の場所を選択・決定。
- ④ハウステンボス施設内で使うチームの旗をA3用紙で作成。チーム毎に携帯で撮影し、各教員（クラスカウンセラー）にmailで送る。各チームが事前に調べた内容（メンバー紹介、ハウステンボスで興味のあること、必ず訪問する3カ所の紹介）などを発表。

【訪問当日】

- ①ハウステンボス到着後、営業部長による「ハウステンボスの歩みと観光政策」についての講演を1時間ほど聞き、ハウステンボス、企業の歴史を学ぶ。質疑応答時間あり。
- ②講演終了後、チームにわかれ、昼食をとり、チーム毎に行動を開始する。
- ③集合時間・集合場所の確認

【事後活動】

- ①各チームで集まり、報告会の準備をする。
報告内容は、A3用紙3枚を使用。
1枚目：講演内容に関する感想など
2枚目：ハウステンボス施設見学からわかったこと・感じたこと
3枚目：5回にわたるグループ活動に関する学び・感想など
- ②報告会の発表練習をする。必ずメンバー全員が一言ずつ発表すること、当日ハウステンボスに行けなかった学生も必ず発表することを条件とする。
- ③報告会：各チーム8～12分程度の発表
A3用紙3枚以外に、iPadなどを使用し施設見学で撮影した写真を複数紹介してもよい。

以上が、学生の要望「自分たちで何か計画して実行したい」を授業で実施した内容である。2年間かけて学生がどのように成長したのかを説明するのは難しい。しかし、成果として第一に、講演の終わりに学生から多くの質問があったこと、第二に、施設見学を終え帰途につくための集合時間・集合場所に、予定より早く全学生が集合し出発時間が守られたことを考えると、成長した姿が見られたと考える。次項では、この2年間にわたるS.D.セミナーと基礎ゼミの合同セミナーに関するアンケート調査の結果を紹介する。

3) 合同セミナーに関するアンケート調査

- アンケート実施日：2016年6月6日～13日
- アンケート回答者：55名/69名（回収率80%）

	男性	女性	未記入
日本人学生	8	7	
留学生：中国	13	11	2
韓国	4	2	
ベトナム	4	3	
ネパール	1		

○アンケート回答方式（選択方式・記入式）

1	全くそう思わない	2	そう思わない	3	どちらとも言えない	4	そう思う	5	大変そう思う
---	----------	---	--------	---	-----------	---	------	---	--------

I. あなたの考えに最もよく当てはまる回答に○をつけてください。

【合同セミナー前】

1	一年生の4月、友達ができるかどうか不安だった。	2.93
2	S.D.セミナーに参加するのはとても緊張した。	2.82
3	S.D.セミナーのクラスの友達とはすぐに仲良くなれた。	3.53
4	クラスカウンセラーの先生とのコミュニケーションはとりやすかった。	3.87
5	クラスカウンセラーの先生がいて安心感があつた。	4.04

【合同セミナーが始まって】

6	違うクラスの友達を作るのに合同セミナーは役にたった。	3.58
7	「私の大学生活～社会人への準備～」の作文練習は難しかった。	3.29
8	コース選択に関する担当教員の説明は役にたった。	3.87
9	商学科の文集作りは、クラスで協力する活動として意味があつた。	3.69
10	1年生の秋学期終了時期には、大学に友達がいる安心感があつた。	3.74

【学外研修行事：ハウステンボス訪問研修】

11	事前準備において、グループの仲間とコミュニケーションがとれた。	3.04
12	授業の計画に沿って、グループ活動は計画通りに協力して進められた。	3.87
13	研修当日、グループの仲間と共に楽しく課題をクリアできた。	3.76
14	研修当日、他のグループとも協力して行動できた。	3.69
15	研修後の事後報告会の準備、発表はグループで納得いくものができた。	3.67

【3年：専門ゼミが始まって】

16	専門ゼミの友達の名前と顔は、全員知っている。	3.65
17	ゼミの友達と一緒に活動することが楽しい。	4.00
18	専門ゼミの先生とのコミュニケーションはとれている。	4.16
19	他の学科にくらべて、商学科の専門ゼミは仲がよい。	4.00
20	自分の将来に対する悩みや不安をゼミの友達や先生に話せる。	3.82

【全体的振り返りと今後】

21	3年生の専門ゼミが始まるのに不安を感じた。	2.50
22	グループワークやペアワークといった友達と協力する活動に慣れた。	3.45
23	専門ゼミが始まり、1、2年の合同セミナーの回数が多すぎたと感じた。	3.25
24	自分で考えて行動できるようになった。	3.70
25	合同セミナーでの学習は、専門ゼミに活かせる。	3.6

【記入形式】

26	あなたはいつ頃大学に慣れましたか。		
	1年生の春学期	23名、1年生の秋学期	9名
27	2年生の春学期	10名、2年生の秋学期	0名
	慣れていない	2名、回答なし	7名
27	あなたは先生に今まで相談したことがありますか。		
	ある	9名、なし	11名、特になし
28	相談内容：将来や卒業後の進路につて、インターンシップや就職について、日本語能力試験や英語の試験について、文集作成について		
	2年間の合同セミナーでの活動で、後輩達に体験してほしいことと、その理由について書いて下さい。		
	<p>[体験してほしいこと]</p> <ul style="list-style-type: none"> ●一緒に活動すること ●一緒にゲームをすること ●グループワーク ●外で活動すること ●ボランティア活動 ●学外研修行事 ●留学生と日本人が言葉を教え合う授業 ●大学生生活を楽しむこと ●先輩と相談すること ●クラスの人と自然に仲良くなること ●ハウステンボス ●他のクラスと一緒に活動 	<p>[体験してほしい理由]</p> <ul style="list-style-type: none"> ●違うクラスの友達と一緒に活動するとすぐに仲良くなれたから。 ●友達ができる授業だから。 ●友達もできるし、勉強もできるから。 ●日本の文化をもっと知りやすいから。 ●活動のなかで勉強できるから ●ためになる話も聞けたし、グループでの活動で楽しめたから。 ●留学生が多いからお互いの言葉を学べるから ●いろんな経験ができたから ●先輩の経験が必要だから ●グループの時に仲良くなって大学生活が楽しくなるから ●みんなと一緒に遊んだり、課題をしたり、楽しくなりましたから。 ●友達がたくさんいて楽しいから。 	

Ⅲ. 初年次教育における成果と問題点

Ⅱ-3)で行ったアンケートに関してポイントの高かった項目(4.00以上)は、5)クラスカウンセラーの先生がいて安心感があつた、17)ゼミの友達と一緒に活動することが楽しい、18)専門ゼミの先生とコミュニケーションがとれている、19)他の学科にくらべて商学科の専門ゼミは仲がよい、以上の4項目である。逆に、ポイントの低かった項目(2ポイント台)は、1)1年生の4月、友達ができるかどうか不安だった、2)S.D.セミナーに参加するのはとても緊張した、21)3年生の専門ゼミが始まるのに不安を感じた、の3項目である。

これらの結果から、ゼミに参加する際に目立った緊張や不安はなく、参加しやすかつたようである。また、学生は、各クラスのクラスカウンセラーである教員との関係を構築し、教員との関わり方を身につけることができたようである。3年の専門ゼミでは、S.D.セミナーや基礎ゼミで関わつたことのない教員もいることを考えると、学生の相談相手に教員が加えられる可能性も高まつたのでないだろうか。

この全体の合同セミナーを始めるにあたり設定した3つの目標、別のクラスの友達を作り商学科全体に友達の輪を広げること、友達とペアワークやグループ活動を通して大学生活に慣れること、商学

科所属の教員の顔を知り相互理解を深めることは、概ね達成されたと考える。

さて、学生のアンケート結果と、合同セミナーに参加した教員、専門ゼミ担当教員からのヒアリング内容から合同セミナーに関する考察を加える。

アンケート調査23) 専門ゼミが始まり、1、2年の合同セミナーの回数が多すぎたと感じたという項目に関して、アンケート回答者の半数近くの23名が感じていた(大変そう思う10名、そう思う13名)。この回答から考えられることは、個人的な教育的支援が不足したのではないかということである。また、教員からのヒアリングからは、学生個人の能力開発・学力向上の支援が難しいという意見が多く聞かれた。これは、入学してくる学生の学力低下の影響も考えられるが、留学生を含む多様な学生ら一人一人に適した教材の選択が難しい点に関係していると考えられる。

今回の合同セミナーを通して考える初年次教育における問題点は、1) 初年次、2年次までの学習と3年次の専門ゼミとの連携、つまり専門領域への導入、2) 学生一人一人が、大学に必要な学習技術(読み、書き、批判的な思考力、調査、タイム・マネジメント)を習得する支援、3) ライフプラン・キャリアプラン作りへの導入、の三点である。

これら三点は、他科目、他学科担当の教員の協力を要し、また学生が大学入学前までに得た学習内容、学習姿勢などを一つ一つ丁寧にリサーチすることが求められる。また他大学と大きく異なる点としては、在籍する留学生の数である。出身国が非漢字圏の学生も増加傾向にあるので、読む力、書く力、話す力、聞く力、つまり語学の四技能をどのように育成するかも課題である。

おわりに

以上、見てきたように、A大学経済学部商学科において2014年度入学者に対する初年次教育のS.D.セミナー、二年次教育の基礎ゼミを合同セミナーとして実施した内容、結果、そこから見えてくる初年次教育における成果と問題点を提示した。

これらの内容を踏まえ、A大学において今後取り組まなければならないことは、初年次教育を初年次におこなう教育として終わらせるのではなく、2年次、3年次、4年次へと続くプロセスにおける最初の重要なステップとして捉え、学士課程教育全体の基礎・土台を形成していく重要な教育期間であるとする共通理解と意識形成であると考えられる。

A大学のように留学生の入学者が増加傾向にある大学は、今後も増えていく留学生入学者と日本人学生がどのようにすれば交流し理解し合えるか、どのような授業内容であれば協力して活動できるのかについて検討する必要があるのではないだろうか。

各自の進路を選択する時期に、留学生も日本人学生も、大学生生活を振り返って「あの活動やあの経験が今の自分に役に立っている」と言えるようなプログラムやプロジェクトをA大学が提供できるかが、大学教育における成果になると思われる。グループ活動であれ個人活動であれ、学生の主体性を引き出し、高校生から大学生への「移行(transition)」がスムーズに行われ、専門領域へのステップを確実に踏み出せるような初年次教育のあり方と、導入方法の検討を今後も続けていかなければならない。共通シラバスのもと実施されているA大学の初年次教育の一環であるS.D.セミナーの内容

が、教員の創意工夫のもとになされ、初年次が終わる頃、A 大学が育てたい学生像に沿う学生が輩出されるように、初年次教育について再考する段階にきていると考える。

参考文献

- 1) 初年次教育学会（編）、（2013）『初年次教育の現状と未来』世界思想社
- 2) 川嶋太津夫・濱名篤（編）、（2006）『初年次教育－歴史・理論・実践と世界の動向』丸善株式会社
- 3) 山田礼子（2012）『学士課程教育の質保証へむけて－学生調査と初年次教育から見えてきたもの』東信堂
- 4) 石倉健二、高島恭子、原田奈津子、山岸利次、（2008）「ユニバーサル段階の大学における初年次教育の現状と課題」『長崎国際大学論集』第8巻、167-177頁。
- 5) 川那可隆司（2015）「立命館大学における初年次教育支援の課題と展望－初年次教育プロジェクトの活動から－」『立命館高等教育研究』第15号、73-84頁。
- 6) 吉岡路（2013）「学習者を主体とした高大接続教育の課題と展望」『立命館高等教育研究』第13号、43-60頁。
- 7) 文部科学省「学士課程教育の構築に向けて」中央教育審議会答申（2008）
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2013/05/13/1212958_001.pdf#search='学士課程教育の構築にむけて'